

鳥居龍蔵と 中国民俗学

末成道男

鳥居龍蔵は、東アジア人類学を創始した巨人である。しかし、その足跡はむしろ中心よりも周辺になじむかのようである。これは、かれの中国民俗への関心のあり方と密接にかかわっている。

鳥居龍蔵の名前は、世間では牧野富太郎と並んで学校も出ずに自らの意思と努力で斯学の蘊奥をきわめた町の大学者というイメージが強い。世界的な業績をあげながら、官中心の学界から正当な評価を与えられないという不遇な中で一般の読者のなじみやすい言葉でかたつた不遇な学者として、同情のまじった尊敬を集めた。鳥居の場合、このような一般的なイメージと実際とは若干のずれがある。たしかに、小学校中退であったが、比較的裕福な商家の出で様々な教師について中学校程度の学力を自修しており、また、東京に出てからは苦勞もしたが、二〇歳のとき東大人類学教室の標本整理係になってから、二八歳で助手、講師をへて助教授となり五四歳で辞職するまで三四年間は官学に勤めていた。また、辞職後は、自分で人類学研究所を作りはしたが、上智大学では文学部長として迎えられ、國學院大学の教授を歴任した。したがって、彼はたしかに自分を辞職に追いやった学内勢力への複雑の想いは抱いていたであろうが、自己の学問的軌跡には自信をもっていてそれほど強いコンプレックスを抱いていたとは思えない。松本清張ばりの、「本郷通りを歩くときも東大と反対側を歩いた」

というのは虚像であろう。ここで取り上げたいのは、このようなずれではなく、かれの業績に関する一般の評価と人類学に見られる評価とのずれである。高低の問題ではなくポイントがずれていて、世評のように徒に持ち上げるだけだと却ってかれの真価を見過ごしてしまうことにつながりかねない。一方、従来の学問的評価が正鵠を得ているとは限らない。そして、これは以下に述べるように民俗への関心のあり方とも関係があるのである。

鳥居龍蔵が、知名度をもち広大な地域をカバーし、しかもその当時としては世界的な水準の業績をあげていたにもかかわらず、次の世代の文化人類学に与えた直接の影響は考古学を除いてそれほど大きくはなかった。その原因は端的に言えば、かれの関心と研究の中心が考古学、物質文化、形質およびそれらの歴史的意味付け、とくに日本民族文化との関係に置かれていたのに対し、その後の人類学が現在の学的な社会や文化の研究を中心に進んだことにある。とくに中国漢族の習俗や社会に関する記述は、かれの膨大な文章のうちでもほとんどないか、あってもわずかである。

鳥居の最初の海外調査地は、中国の遼東半島であった。人類学者として、初めて足を踏み入れたフィールドでかれが目をつめたのは、ドルメンなどの考古学的遺物であり、遼代の遺跡であった。日本陸軍占領後間もない時期で、速成で習得しようとした中国語は用をなさなかったから、仮

に人々の生活に興味を持っていたとしても、民俗を掘りあげることは難しかったであろう。この初体験の現地調査を小手試しとして、その翌年に訪れた台湾原住民調査は五年ほど続けられ、北千島、西南中国、沖縄、満州、蒙古、朝鮮、シベリア、華北と、ベトナムを除く東アジア全域、さらに南米まで足を踏んだ広大な調査の幕開けとなる。

台湾では、鳥居の関心は、身長、皮膚の色、頭の形などの体質や、道具、衣装などについての物質文化に向けられていて、原住民の生活自体には深く及ばなかった。また、原住民の調査が主目的だったこともあって、鳥民の多数をしめていた漢族の風習については触れることが少なかった。しかし、著しい漢化の過程にあった平埔族については、かなり関心を寄せていたことが、その短文や写真などから窺える。もともと、これも漢族の習俗への興味というよりは、固有の文化を失い漢族に吸収される少数民族の悲哀への共感が主なものであった。

西南調査は、少数民族を求めての旅行であったが、当時の台湾原住民と対照的に漢化の度合いが著しかった。少数民族地帯へ向かう船旅の途中で、難所に廟があり、竹竿に結びつけた寄進袋で喜捨を乞う老人、悪疫を祓うための龍舞などについても目をとめている。この調査では、対聯、義塚、桃源洞や馬援の廟、道教的民俗信仰「石敢当」について記録している。苗族調査に関しては、調査報告書全二

鳥居龍蔵略年表

1870 (明治3)		徳島にて出生
1886 (明治19)	16歳	東京人類学会に入会
1890 (明治23)	20	東京人類学教室標本整理係
1892 (明治25)	22	東京に移住
1895 (明治28)	25	遼東半島調査 (第1回満州調査)
1896 (明治29)	26	第1回台湾調査8月 (1900年第4回調査まで続く)
1898 (明治31)	28	東京大学助手
1902 (明治35)	32	西南中国調査
1904 (明治37)	34	第2回沖繩調査 (第1回調査は、1896年台湾調査帰途の数日)
1905 (明治38)	35	第2回満州調査 (1935年第9回調査まで続く)
1906 (明治39)	36	蒙古調査 (1933年第3回調査まで続く)
1911 (明治44)	41	第1回朝鮮調査 (1932年第7回調査まで続く)
1919 (大正8)	49	シベリア調査 (1928年第3回調査まで続く)
1924 (大正13)	54	東京大学を辞職
1926 (昭和1)	56	山東省調査
1937 (昭和12)	67	南米調査 (1937-1938年、11か月)
1939 (昭和14)	69	燕京大学客座教授として渡中
1951 (昭和26)	81	北京より帰国
1953 (昭和28)	83	死去

八六頁のうち、体質三五頁、言語二四頁に対して、髪型、衣食住や性格などの土俗関係はわずか六頁しかなく、残りの大半は関連する漢籍資料の引用によって占められている。土俗関係には衣服、刺繍、食物、居住、農業、宗教、制度、娯楽、婚姻、制度などの項目が並んでいるものの、それぞれにつき数行ずつ申しわけ程度に記されているにすぎない。

鳥居は、この人類学調査の研究のみを記した苗族報告書のほかに、少数民族に関係ない地方についても、日記の連絡上、上海から常德までの見聞記を『別編』として収録している。これには、日常的な記録にまじって、風呂、茶館、舟を使った乞食、あるいは関帝廟の三国志の芝居を見ようとしたところ、鄭重に正座に招かれ、芝居は天官という新任官吏向けの縁起もの幕間に切り替えられたので祝儀を与えそうそう引き揚げたこと(『全集』一一・二四四)、旧暦の正月にあたり商店が閉まるので人々は十二月に買い物をしたことは記しているが、とくに、歳時記にのっているような正月の行事などを積極的に見ようという構えはみられない。「爆竹がそのつどつどに鳴らされ……子どもは玩具の青龍刀を振り回していかにも蜀の都の正月らしい気持ち……それらに関する風俗習慣の研究に大変利益を得たのである」とは書いているが、調査熱心な鳥居にとってはむしろ「全く六日間、遺憾ながら各所を回って見ることでできなかった」というのが本音で、こうした民俗は、むしろ

「調査」の妨げでしかなかったろう。このように漢族の民俗一般については、強い関心を寄せなかったが、この地域の漢族に関して注目すべき事実を記している。それは、漢族が少数民族の民俗を採り入れる「逆漢化」の現象である。これは、彼自身その後まとまった形でとりあげることはなかったが、現在のエスニシティ研究でも重要なポイントとなっている。

この調査において、すでに自然人類学、言語学の比重の高い現在の総合人類学から、過去とのつながりを重視する歴史人類学への転換が予見されていた（『全集』一・四八一—四八二）。凌純声による苗族調査報告についての書評の中でも、マリノフスキーの現地調査方法を採用していることを評価しながら、中国独自の方法として、古代文献の利用と実地研究による中国独自の方法を探るべきであると主張している（『全集』六・三五六）。こうして、これらの研究の主流が総合人類学から過去へ向かうと共に、現在の民俗とは一層疎遠になる。

満州調査においても、概説的に『三才図絵』、『皇職貢図』などから風俗について触れることはあるが、現実に見聞した民俗の直接的な記載は少ない。「日本国周囲民族の原始宗教」において漢族の民間信仰についてまとめたところで、吉林省山中を夜間通過したとき、恐怖感におそわれた馬車の御者が虎頭鈴をつけたという記述や、漢族の宗教には北

方的要素と南方的要素が混在していること、民間信仰としての道教にシャーマニズム的要素がはいっているのは、日本の神道にもシャーマニ的なところが似ていることを指摘している（『全集』七・三三七）。

蒙古調査は、家族ぐるみの調査が多く、通訳が少なく頼りにならないのであるべく使わずに、蒙古語を習いながら進めていった。こうした住み込み調査に似た状況に身をおいていたので民俗にふれる機会は多かった。また、鳥居も総合人類学の旗を全く降ろしたわけではなく、考古学、形質人類学と並んで土俗学の調査も進めていると述べている。例えば、モンゴル族の信仰対象であるオボがあったこと、妻女連れだったため、夫人、子ども、老人も出てきて、里謡、おとぎ話などを聞かせてくれたといった記述はあるが、その内容は記していない。前回の調査に約束した写真を渡そうとしたラマ僧はすでに他界していて果たせなかったという記載には、かれと地元の人々との関わり方が示されている。明治四一年の調査地を昭和八年、一〇年に再訪してモンゴル族の居住地に漢族がかなり入っている変化を記している。一方、土俗を分担としてまとめた、きみ子夫人の「土俗学上より観たる蒙古」は、衣食住から礼儀や猛犬のあしらい方などが女性の立場からの観察が生彩のある筆致で描かれていて、民俗誌というにふさわしい。

朝鮮については、巫覡や済州島の民俗誌など短編である



中国東北地方の馬車を利用しての移動
当時の調査旅行の状況をよく伝える。



静かな華北農家のたたずまい
鳥居はたしかにこのような漢族の生活
のなかにある民俗を見ていた、しかし
書き留めることは少なかった。



台湾平埔サオ族の杵歌
鳥居は、まもなく滅び行く民俗として
写したが、観光化と抱き合わせで今な
お残っている。

が、鳥居には珍しく民俗に関し、まとまった記述が認められる。これらは、いずれも日本との比較、関連を念頭に書かれている。

このように鳥居自身個々の民俗行事を自己の研究に結びつけようとする構えは弱かったが、民族や民俗への関心を全く持っていなかったわけでない。国内では、宮崎県の委嘱で一九一七年に古墳調査、一九一八年に信州の調査に協力し、地方史をまとめている。東大を辞職してから大陸の遼代研究に向かうまでの一〇年間、武蔵野研究会において遺物や遺跡の調査を進め、その担い手の生活との結びつきを考察したスケールの大きな民俗の考察をおこなっている。現在学的テーマでは、高麗郡の高麗神社や小江戸川越の考察といった形で現れている。しかし、この場合でも遺跡調査が中心で、族制や民間信仰、口碑伝承をあつかう柳田の民俗学とは明らかに異なっていた。また、同じころ台湾原住民調査もした坪井同門の伊能嘉矩が、帰国後民俗を主体とする郷土誌に関心をもち、柳田国男とも深い交流のあったのと比べると、その方向の違いは大きい。

鳥居は、一八九六年に始まる台湾調査の時から写真機を持ち込み、調査の一部として本格的に利用している。写真資料にも民俗を示すものはそれほど多いとは言えないが、朝鮮、沖縄、満州（写真集）などに含まれている逸品を見ると民俗に無関心であったとは思われない。朝鮮に特に民

俗を伝える枚数が比較的多いのに、それに関連する文章として書き残すことが中国本土において少なかったのは、報告書自体が事情により提出保存されなかったことと、朝鮮調査は他の専門分野との関係で鳥居の分担が石器時代遺跡と生体計測に限定されていたため、取えて書かなかったということも考えられる。

晩年の大陸における遼代研究においても、考古学的な資料についての考察がますます主要となるが、「遼の上京城内遺存の石人考」（『全集』六巻）では、石人をめぐる伝説、「金の上京城及びその文化」（『全集』六巻）において、史書より金の風俗を詳しく引き、ところどころ、現存の周辺少数民族の例を挙げている。例えば、居住の項では、実見したカン（オンドル）や鳥居門などについてもふれているが、文献資料をひいて論じている場合の方が多い。

六九歳で燕京大学に招かれ北京に一二年間滞在し研究していた時期の文章も考古学的分野が中心である。太平洋戦争開戦から終戦、さらに社会主義政権への移行という激動期にあつて現在の学的な民俗への言及はほとんど見られない。「今の日本人は、中国人の底力を知らない」と述べていることから推察されるように、中国の学生をはじめ民衆との接触は通りいっぺんのものではなく、漢族に無関心であつたためとは言えない。それにもかかわらず、中国の民俗や民衆の生活に関して詳しい記述が乏しくなつてゆく

のは、焦点が有史時代の考古学にしぼられた他にいくつかの理由が考えられる。まず、この時期においては、日本の大陸侵略と重なり、敵性大学への勤務者として半ば特務の監視下におかれていたため、現在を学問の対象とすることからいっそう遠ざかり、文字にすることに慎重ならせたのではあるまいか。また、写真を調査の一環として利用することは、個人調査の場合、注意力の配分でかなりの部分がさかれることになり、また、撮影してあるという安心感から文字の記録がそれだけおろそかになるという現象が起こりかねない。もちろん、個人差もあるが、物理的に割ける時間の配分は少なくなることはあっても増すことはない。機械的な絶対時間だけでなく、相乗効果をも含む質的な関係も考慮する必要もあろう。かれが、まず目指した総合人類学の方角の中には民俗は物や形質ほど明確な位置を占めていなかった。写真という要素が入って、民俗は省かれやすい周辺の位置にあり、さらに過去への志向が強調につれますます希薄になっていったと推測される。

以上のように中国民俗学を漢族に限ると、鳥居の場合、副次的な関心あるいはそれ以下の比重しか占めていなかったと言える。ところが、漢族以外の民俗をも含めるものとする、様子は変わってくる。漢族以外においても社会文化一般に関する習俗への関心は、台湾、苗族の場合に明らかのようにそれほど強いものではない。しかし、鳥居の

もつとも鋭敏な感覚でとらえていた方向にこの民俗という概念を拡大するならば、それは少数民族の民俗が多数民族によって圧倒、吸収されてゆくことへの悲しみを表現し得るような動的な概念ではあるまいか。最後の一人となった台湾原住民の平埔族婦人にカメラを向け、北千島アイヌの消滅の危機を感じ、必死で記録しようとし、言語さえ忘れ去られた満族の固有性を漢化された宮殿内で探したそうとし、二十数年を隔てた蒙古旅行で次々と現れる牧民地域の漢族化の過程への観察こそが、遺跡研究に没頭するようになった鳥居の関心の片隅につねに立ち現れていた問題であり、鳥居自身は学問上の課題として取り上げようとは思ってはいなかったにしても、その記録の延長線上に指示されるものである。変化する民俗、強大な異文化に飲み込まれんとしている民俗については、鳥居は見逃さずそつと文字または影像として記録するのである。われわれには、鳥居このような隠れた指針をもつと読み取る敏感さが必要であらう。

注

- ① 大林一九七六・六二六も、千島アイヌの調査について、今日の民族学者が見て一番物足らなく思うのは、社会組織に関する記述がきわめて貧弱なことであると述べている。
- ② 塚田一九九三・六〇。
- ③ かれの写真助手としての役割を果たされていた次男の

龍次郎氏が、年画に興味を持ち、収集していたと伺ったことがある。

④ これらの考察に関して、何もそんなまわりくどく考えなくても、鳥居は、単に漢族のような中心的民族よりも周辺の民族に関心を示す人類学者であったことを示すに過ぎないという批評も出てくるかもしれない。たしかに、台湾研究にしろ、大陸の中国研究にしろ、日本人類学による漢族研究の出遅れ(末成一九九五)あるいは周辺への着目(末成一九九九)は、鳥居の漢族への関心の少なさと関連を持つているようでもある。もし、そうであるとしたら、鳥居の足跡と対象への関わり方は日本人類学にとっていっそう切実な意味を持つていくことになるう。

参考文献

- 国立民族学博物館編 一九九三 『民族学の先覚者——鳥居龍藏の見たアジア』全四四二頁、国立民族学博物館
中蘭英助 一九九五 『鳥居龍藏伝——アジアを走破した人類学者』全四四二頁、岩波書店
末成道男 一九八八 『鳥居龍藏——東アジア人類学の先駆者』綾部恒雄編『文化人類学群像三…日本編』四七—六四、アカデミア出版会
末成道男 一九九一 『鳥居龍藏の足跡』『乾板に刻まれた世界——鳥居龍藏の見たアジア』六一—二〇、東京大学総合研究資料館

末成道男 1995 *Perspectives on Chinese Society: View from Japan* (Eds. with J. S. Eades, & C. Daniels 373pp. Center for Social Anthropology and Computing, University of Kent at Canterbury, England)

末成道男編 一九九九 『中原と周辺…人類学的フィールドからの視点』三八七—四〇八頁、風響社

東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編 一九九一 『乾板に刻まれた世界——鳥居龍藏の見たアジア』東京大学総合研究資料館

鳥居博士顕彰会編 一九六五 『図説・鳥居龍藏伝』全一五〇頁、鳥居博士顕彰会

鳥居龍藏 一九七五—一九七七 『鳥居龍藏全集』全二二巻、別巻 朝日新聞社

鳥居龍藏写真資料研究会編 一九九〇 『東京大学総合研究資料館所蔵鳥居龍藏博士撮影写真資料カタログ』四冊、東京大学総合研究資料館

鳥居さみ子 一九二七 『土俗学上より観たる蒙古』大鑑社
塚田誠之 一九九三 『鳥居龍藏の西南中国調査』『民族学の先覚者——鳥居龍藏の見たアジア』五六—六〇、国立民族学博物館

※写真真出典——東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編 一九九一 『乾板に刻まれた世界——鳥居龍藏の見たアジア』※所蔵——東京大学総合研究博物館